

プーチンに教えたい一句

8月の紙面は毎日「戦後78年」のロゴが光っていた。中でも「核抑止の破綻 直視を」（7日朝刊）と大きな見出しは「広島原爆の日」の市長宣言。抑止論を唱えてのらりくらりと核禁条約と距離をおく岸田文雄首相への痛烈な一撃。長崎の鈴木史朗市長も「核抑止脱却 勇気持つて」（9日夕刊）と諭すように迫ったが、首相は「聞かない力」を発揮し作文を読み上げていた。

「上関町長 苦渋の決断」（19日朝刊）で使用済み核燃料の中間貯蔵施設の調査を容認。住民とのトラブルに政府は知らんぷり。既に文献調査に名乗りを上げている北海道の寿都町や神恵内村も事情は同じ。核燃料関連施設の自治体への押しつけには、財政難にあえぐ過疎地の苦難が透けて見える。二割自治と言われる税配分の見直しを含めて国が責任を負うべきである。

「処理水 放出（25日朝刊）に内外から厳しい反応が。中国は「核汚染水」と喧伝して「日本産水産物を全面禁輸」（同）に走り「福島漁師 葛藤」（同）、「公明代表が訪中延期」（27日朝刊）と余震はなかなか収まらない。

連日紙面に躍る「核」の文字に疲労感を覚える。背筋を伸ばしてくれたのは俳句。「真つ青な空がミサイル落としてけり」（8日夕刊）はウクライナの若き女性ウラジスラバさんの作。俳人黛まどかさんの手引きで初の句集『ウクライナ、地下壕から届いた俳句』を刊行、戦争の惨状を17文字に込めた故郷を想う。他方、本紙が公募した「平和の俳句」に今年は6746句も届いた（15日朝刊）。その入選作が毎日一句ずつ朝刊の一面をつつましく飾っていた。選者の総評によると応募の増加は「平和の希求」がより切実になり不安や怒りの表現も多い。増加はうれしいが戦火を詠むのはつらい。

担当記者が選んだ「子どもの10句」に入来嘉飛さん(16)の「きらいな子きつと誰かのだじいな子」（同）。なんと素晴らしい想像力。原爆やウクライナの現実を越え他者を想う平和の本質を衝く。プーチン大統領に教えたい一句。若者の視線の先に未来が見える。（静岡文化芸術大名誉教授）

2023年9月3日

中日新聞（朝刊）p.7